《解　　題》

平野健一郎論文について

宇　野　重　昭

本論文は、アジア政経学会の元理事長であった平野健一郎教授が、2000年11月に同学会の全国研究大会においておこなった報告に平野教授自身が加筆・修正したものである。

平野教授は、前東京大学教授・現早稲田大学教授で、本来国際関係論・東アジア国際関係史の専門家であったが、ベンジャミン・I・シュオルツ教授の著名かつ難解な『厳復』論の名訳をもって知られ、以後政治文化論、文化接触論、文化変容論、そして最近では文化触変論の独特の分野で活躍し、国際関係論と地域研究の結合に新しい地平を開いている研究者である。

当初本学としては、『北東アジア研究』第２号の巻頭論文をお願いする予定であったが、上記の優れた報告が未発表であることを知り、是非島根県立大学NEARセンターの紀要で公開したいとお願いして加筆していただいたものである。

このアジア政経学会の研究大会は、「グローバリゼーションの中のアジア」を統一テーマとしたもので、グローバリゼーションの時代におけるアジア研究一般を問題としている。したがって直接北東アジア研究そのものを取り上げているわけではない。しかし平野教授の分析および解釈は、アジアの地域研究にも北東アジア地域研究にも共通する基本的視座を明らかにしており、北東アジア研究にも示唆するところが極めて大きいものと考えられる。

いうまでもなく現在のグローバリゼーションの影響力は圧倒的である。そしてその中心には西欧において生まれ育った知的伝統、経済・社会革命、政治的・軍事的覇権の力が機能している。それはたんなる経済的市場原理の影響力だけではない。

それだけにこれに対抗することは容易なことではない。元来、アジアなどの後発地域は、国民国家の形成、国民経済の自主性、市民社会の成熟をもって対抗しようとした。しかしこれらの条件は必要条件であっても、十分条件ではない。ここで平野教授が、シヴィック・ナショナリズムによる国民的アイデンティティーの復権を提起する佐伯啓思教授、市民社会のグローバリズムによって市場の暴走を国際的に規制しようとする坂本義和教授を取り上げて批判し（両者は基本的に相反する方向性をもっているが）、共に「敗北主義に近づく」と喝破した点は、注目される。

それでは圧倒的なグローバリズムに対して抵抗する術はないのであろうか。ここで平野教授はグローバリズムを外力として捉え、これにトータルに対抗しようとする“結果敗北主義”を捨て、むしろアジアの国々が、グローバリズムをとりいれつつも、なおこれを外

力として抵抗するそれぞれの国の文化や社会の「反作用」を広い意味でのグローバリゼーションとして捉えなおし、「再帰的近代化」として再定義する。それは従来の「近代化と伝統」といったような二分法的な接近方法から袂を分かつものである。外からやってくるグローバリゼーションという現象に、受け手の側における社会・文化変容という現象を対置・連関させることによって、バランスをとろうとするものである。

元来筆者（宇野）は、筆者自身の政治文化論において、外来的刺激に対する伝統の内発的発展を強調し、伝統の革新を呼びかけてきた。現在筆者としてはこの立場を決して捨てるものではない。ただこの発想では、外来の近代化論やグローバリズム論に対する対抗原理が強く出過ぎる。また圧倒的な外来の力に打ち勝つ条件を見出すことが困難であった。その意味で、伝統の内発的発展がグローバリズム自身のなかの一環となり、グローバリズムのありかたに衝撃を与え、不断にグローバリズムそのものの克服をめざす可能性をはらむ平野教授の問題提起は新鮮である。

もっとも平野教授は内発的発展という言葉は用いず、「社会・文化変容」という相対的に客観的な表現を用いている。そしてそれは変容を拒否する伝統とは一線を画する。同時に、その変容はグローバリゼーションそのものでもない。「各地の人々がグローバリゼーションに懸命に対抗することによってつくりだす社会・文化変容は、全体として見れば、再帰的近代化、あるいは文化触変であって、単純なグローバル化ではない」のである。

この文化触変は、グローバリゼーションと密接な関連性を持ちながらなおそれぞれの地域においてなお固有のものである。「文化触変は個別文化の固有性を維持しつつ、文化を造りかえる文化創造であり、世界全体として見れば、文化の多様性を維持する結果につながる活動である」。

文化の多様性の積極的肯定こそ、現在の世界において最も尊重されるべき価値の一つである。上記の平野教授の結論は、文化の多様性を特徴とする北東アジアにおいて、是非取り入れたい貴重な問題提起ということができよう。

(Shigeaki UNO)